

## 「夜間学級における教育活動の充実」

## 調査の目的・問題意識

## ◆目的

- ①「日本語指導の更なる充実」 日本語の習得が十分でない外国籍の生徒を多く抱える夜間学級において、一番の課題は日本語指導である。また、教員には異動が伴うため、配属された教員に一定以上の日本語指導力を維持させることも喫緊の課題となっている。そこで「日本語指導の充実」を本調査研究の一番大きな柱として設定した。
- ②「全教員による授業改善による各教科指導の充実」 日本語指導を充実させ日本語の習得が効果的に行われることで、教科指導をより早いタイミングで始めることができ、教科指導の時間をより確保することができる。また、学び直しの生徒も夜間学級に在籍していることを考えると、教科指導の充実も日本語指導の充実とともに推し進めていかなければならない。よって、「教科指導の充実」を本調査研究の2つめの柱とした。
- ③「本夜間学級の周知と生徒の負担軽減」 新設校であり設備が充実している本校の強みを広く発信していくことで、今まで施設面で入学を断念していた生徒へ学習の場を提供していくことは大切なことである。また、発達を含めた様々な障害のある生徒が今後入学してきた際の教育活動（特に校外）においても、そういった生徒の負担となる要素を取り除くことにより、充実した教育活動の提供と周りの生徒の心の成長を図ることができると考え、「本夜間学級の周知と生徒の負担軽減」を本調査研究の3つ目の柱とした。
- ④「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現に向けた取り組み」 昼間部の通常学級、軽度の知的障害等特別支援学級（固定学級）、夜間学級の3つの学級が併設されている中学校は都内では本校だけである。その特長を生かした教育活動を推進することで、「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現」を図ることを本調査研究の4つ目の柱とした。

## 創出した先進事例

## ◆実施に向けて検討した方策

- ①「日本語指導の更なる充実」
  - ・共通教材及び習熟度別少人数学級編成のための判定試験の更なる充実
  - ・講師を招聘した日本語指導に関する研修の充実（JSLの指導法の検討）
  - ・個別の指導計画の作成とそれを活用した指導の実践
  - ・令和7年度の教育課程を踏まえた研修の推進
- ②「全教員による授業改善による各教科指導の充実」
  - ・東京都夜間中学校研究会（以下、都夜中研と略す）での教科研修を活用した教科指導指導の充実及び改善
- ③「本夜間学級の周知と在籍生徒の負担軽減」
  - ・公共施設や区内小中学校へのポスター、パンフレットの配布及び配架
  - ・修学旅行時における移動負担軽減のための貸し切りバスの活用
- ④「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現に向けた取り組み」
  - ・本校の学級（昼間部、昼間部知的障害等特別支援学級、夜間学級）による区主催のプラススポーツ大会への参加
  - ・本校の学級間における、クラスレク等を活用した交流学習

## 「夜間学級における教育活動の充実」

### 創出した先進事例

#### ◆実際に行った方策

##### ①「日本語指導の更なる充実」

教員の異動によって新しく配属された教員（新規採用教員を含む）が日本語の指導を行わなければならない現状を考え、令和6年度は、日本語学級のクラスの指導を「共通教材」「漢字」「読み」「会話」「作文」に分け、それぞれの指導時間数分の教材を独自に作成してきたが、今年度は、実際の授業実践を経て改善点を洗い出し、大幅にブラッシュアップした。特にメイン教材となる「共通教材」は、市販の教材「大地」をパワーポイントで作成し直し、どの教員が授業をしても一定レベルの指導ができるICTを活用した視覚教材となるようにした。

日本語の習熟度別少人数学級を編成するための判定試験においても、作成した複数の判定試験のレベルが適正であるか、難易度に偏りはなく、クラス編成の基準自体が適正であるか、判定試験の実施時期が適切であるか等の検討を加えた。

本夜間学級においては、上記に示すように、ここ2年間で日本語指導についてのカリキュラムを一新し、教材の共通化、根拠のあるクラス分け判定試験の作成等を行い指導の充実を図ってきた。しかし、入級してきた生徒の日本語の習得状況は、教科教育を行うには十分でない場合が多く、卒業までの限られた時間の中で効果的かつバランスよく日本語を習得させるには、日本語教育の中だけでなく教科教育の中での日本語指導を充実させる必要があることが課題として浮かんできていた。そこで今年度は、教科教育を通じて日本語指導を行うJSLの充実をはかるべく、経験が豊富でJSLの実践に長けている講師を招聘し、日本語指導力の向上に努めた。

本校の夜間学級在籍生徒に対し、個別の指導計画を作成し一人一人の学習状態に応じたきめ細かな指導につなげた。

視覚的教材やICT機器（タブレット）を活用した指導を行うことは、日本語の習得において一定の効果がある。こういった機器を抵抗なく使いこなせるよう、区から派遣されたICT支援員に講師をお願いし、ICT機器（タブレット）内にあるアプリの使い方を学んだ。また、Copilotに代表されるAI関連のアプリの使い方を学んだ。

##### ②「全教員による授業改善による各教科指導の充実」

今年度より都夜中研の各教科で研究主題を決め、その主題に沿って、1年間研究を推し進めていくことになった。本夜間学級の教員においても、理科及び日本語の教科班会の班長を務めることになった。本学級での教科指導の充実においては、この都夜中研での研究を中心に据えることとし、理科と日本語においては、積極的に研究授業を行うこととした。それ以外の教科においても、すべての教員がいずれかの教科班会に属しているため、年1回の研究授業を通して意見交換や情報の共有を行った。

## 「夜間学級における教育活動の充実」

### 創出した先進事例

#### ◆実際に行った方策

##### ③「本夜間学級の周知と在籍生徒の負担軽減」

本校は新設されて3年目の中学校であり、エレベーターが2基設置されている等、バリアフリーに対応し、東京都にある他の夜間学級に比べ施設面や設備面で充実している。東京都にある他の夜間学級では施設的に受け入れることが難しい生徒の受け入れを積極的に行えるようにするために、公共機関等にポスターを作成・掲示した。また、区内の区立中学校に在籍している外国籍の生徒の進学先の一つとして、夜間学級を検討してもらえよう、各中学校に本校夜間学級のポスターとパンフレットの掲示を依頼した。

3年生が参加する京都奈良への1泊2日の修学旅行において、車いすの生徒や半身にまひが残る生徒、高齢の生徒が交通公共機関を利用した移動をした場合、見学場所に着くまでに体力の多くを消耗してしまうことが十分に考えられたため、生徒の移動手段に貸し切りバスを利用した。

##### ④「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現に向けた取り組み」

本校の昼間部の生徒、昼間部知的障害等特別支援学級（固定学級）の生徒、夜間学級の生徒がチームを作り、毎年12月に実施している江戸川区主催のボッチャ大会に参加した。

令和7年7月17日には、昼間部と夜間学級の交流学習が行われた。夜間学級の生徒が昼間部のすべての教室を訪問し、自己紹介やクラスレク等を行い、交流を深めた。交流学習前の7月8日と10日には、昼間部の希望生徒や教職員が夜間学級の授業を見学し、夜間学級の生徒が授業を真剣に授業を受ける様子を見学した。

他校の夜間学級との交流の場である生徒会連合交流会には希望生徒10名が参加した。

#### ◆生じた成果・効果

##### ①「日本語指導の更なる充実」

日本語学級のすべてのクラスの日本語指導を「共通教材」「漢字」「読み」「会話」「作文」に分け、すべてに共通教材を作成したことにより、新規採用教員が日本語の授業を担当した場合でも、ある一定レベル以上の授業が展開できるようになった。また、実際の授業実践を経て改善点を洗い出し大幅にブラッシュアップしたことで、より分かりやすく理解しやすい教材となり、生徒の実態に即した教材ラインとなった。特に共通教材には、教材内で使われている名称等の音源や文章の音読なども加えることで、教員側が必要に応じて音源を使えるようになり、より効果的な授業が展開できるようになった。

日本語に初めて触れる生徒への教材として、語彙習得を目標とした本学級の最も基本的な日本語教材（60回分のパワーポイント教材/約1150枚）についても、授業での生徒の反応を見ながら大幅にブラッシュアップを加え、最初期に学習する語彙の足りない部分を補えるようになった。

## 「夜間学級における教育活動の充実」

## 創出した先進事例

## ◆生じた成果・効果

クラス分けの判定試験をより精度の高いものにする事で、昨年以上に日本語の習熟度による適切な学級編成が可能となった。主な生徒の声として、クラス分け判定試験におきて、なるべく高得点をとり、より上位のクラスへ移りたいという気持ちが多くの子に芽生えた。また教員の反応として、学力レベルがより均一化することによって指導効果も高まり、昨年度よりも日本語の習得速度が上がった実感をもつ声が多く聞かれた。

日本語指導経験が豊富でJSLの実践に長けている講師を招聘した際、講師の先生には本校の日本語指導について概要を説明し、実際に授業観察をしていただいた。授業観察をすることで、場面場面でのJSLの効果的な指導方法やそのバリエーションを示していただくことができて、具体的な授業実践につながった。実際には、国語科及び英語科、及び特別の教科道徳において、JSLを活用した研究授業を実施し、指導講評をしていただいた。特に英語科では母語での授業を行った後に同じ内容で日本語の授業を行うことで、英語と日本語の両方で書く力の向上が見られた。また、それぞれ母語としない言語での活動に興味をもつことが観察され、お互いが不足している部分を補い合い内容を理解していく様子が見られるなど、一定の効果があったと感じる。

個別の指導計画を作成することで、一人一人の学習状態に応じたきめ細かな指導につなげ、目標や指導内容、生徒の様子について関係者が情報を共有することができた。また、年2回の教員による生徒情報交換を丁寧に実施・共有することで、校内の教職員の共通理解や校内体制づくりに役立てるとともに、集団の中での個別的な配慮・支援についても検討を加えることができた。そして、教員自身が自らの指導を定期的に自己評価することで、より適切な指導の改善につなげることができた。

ICT機器（タブレット）内にあるアプリやAIに関するプリの使い方を学ぶことで、それらを活用した教材作成や授業改善等に役立てるとともに、教員の労働時間の短縮を目的とした働き方改革につなげることができた。

上記の実践をリーフレットにまとめ、都内の夜間学級や区内の中学校へ配布するとともに、区の研究指定校を受けた昼間部の研究発表の際に同リーフレットを配布することで、夜間学級での研究実践の成果を広めた。

## ②「全教員による授業改善による各教科指導の充実」

都夜中研での研究を中心に据え、理科と日本語においては、積極的に研究授業を行った。それ以外の教科においても、すべての教員がいずれかの教科班会に属しているため、年1回の研究授業を通してそれぞれの授業改善に役立てた。なお本夜間学級教員が班長を務めた2つの教科の研究内容は次の通りである。

理科では、授業の中で日常生活で体験する現象を多く取り上げ、科学の知識を身近に捉えさせる工夫をした授業づくりの研究を行い、生徒の状況に合わせて教材を開発することで、理科を身近に感じさせることができ一定の成果を上げることとなった。

日本語では、各夜間学級で行われている最初期の日本語教育の特長や利点を共有し、各校での実情・実態にあうように改善することで夜間学級全体での日本語教育が充実する」という仮説のもと、日本語最初期教育法を確立するための研究を行い、情報や教材の共有化を通して、日本語の最初期教育の充実を図ることができた。と同時に、多様な学習歴をもつ生徒同士が話し合い活動等を通して学び合い教え合うことで、教科指導の充実を図ることができた。

## 「夜間学級における教育活動の充実」

## 創出した先進事例

## ◆生じた成果・効果

## ③「本夜間学級の周知と在籍生徒の負担軽減」

東京都にある他の夜間学級では施設的に受け入れることが難しい生徒を積極的に受け入れられるようにするために、公共機関や区内の区立小中学校に等にポスターを作成・掲示及び配架を依頼した。その結果、昨年度と今年度については、12月時点で定員60名のところ、55名を超える生徒数を確保することとなり、都内の夜間学級の中で最大の生徒数となっている。新設した学校であることも加え、地域での認知度はかなり向上したと考えられる。

生徒の移動手段に貸し切りバスを利用した。実施時期が9月下旬だったこともあり、加えて猛暑での修学旅行であったため、すべての生徒にとって貸し切りバスでの移動は体力の温存や回復を図るに十分な効果を得ることができた。見学場所では生徒たちはある程度積極的に行動することができたため、今後は実施時期の検討もさることながら、移動手段としての貸し切りバスの利用は必要不可欠であると考えている。また、貸し切りバスを活用することで、見学の途中で熱中症等により体調が悪化した生徒の休憩場所として活用することもできた。すべての生徒及びすべての教員からも、次年度以降の移動時における貸し切りバスの導入の声が上がっている。

## ④「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現」

江戸川区主催のボッチャ大会に参加した。その事前練習として、体育の時間を利用してパラスポーツに取り組んだ。参加したチームはそれぞれの学級単位で結成したが、お互いのチームの応援を行い一緒に勝つ喜びができて、同じ学校の一員であるといった一体感を生んだ。

交流学习や生徒及び教職員による夜間学級の授業見学をここ数年継続的に取り組んだことで、昼間部や特別支援学級との交流が深まり、校内ではお互いに挨拶するようになるなど、共に生活する仲間意識の醸成につながった。これからは、お互いを認め合う気持ちを高め、それぞれの心の成長を図ることで、共生社会への理解を推し進めていきたい。

## ◆今後の課題

- ・人権尊重教育を基盤とした魅力ある教育活動の実践
- ・JSLを取り入れることで、日本語指導、教科指導の更なる充実
- ・交流学习の推進、共生社会の実現に向けた取り組み

令和8年3月3日

【調査研究事項番号 IV】 川崎市立西中原中学校

研究テーマ「生徒一人一人の状況に応じた学習指導の充実について」

#### 調査の目的・問題意識

##### 【目的】

川崎市立西中原中学校夜間学級は、外国につながるのある者や既卒者による入学希望者が年々増加している。今後は入学希望者のニーズも一層多様化することが予測されることから、入学希望者が求める学びについて十分に確認し、必要な支援や多様な教育機会を提供することができるような工夫が必要である。そのため、入学前の見学や体験入学など夜間学級と教育委員会が連携して進めることが重要であり、その在り方について研究を進めていきたい。また、夜間学級に通学している生徒は、日本だけでなくフィリピン、中国、インド、ネパール、ベトナム等の多様な国籍を持つ生徒が在籍の多くを占めるほか、10代から60代の幅広い年齢層の生徒が在籍している。そのため、国語や算数・数学等の基礎的・基本的な学習内容の相違が大きく、日本語を含め、生徒の個々に応じた指導が必要である。生徒の状況に合わせた教材の在り方について研究し、生徒の資質・能力の育成を図りたい。

##### 【問題意識】

夜間学級の入学希望者は、既卒者や外国につながるのある者など、様々な学びのニーズを持った者が年々増加する傾向にある。そのため、個々の学習のニーズを適切に把握し、それぞれの学びに応じたきめ細かな対応をしていく必要がある。

そこで、次のことを踏まえて研究を進める。

- 1 入学希望者に対し、夜間学級のねらいや入学後の学習について十分理解できるように、入学前の見学や体験入学における対応を丁寧に行うこと。
- 2 入学希望者について、教育委員会と西中原中学校夜間学級との緊密な情報共有を図ること。
- 3 教育委員会の事前相談や面談で学習状況の聴き取り、西中原中学校夜間学級における入学前見学や体験入学における希望者の状況把握などの情報共有を図ること。
- 4 体験入学で、入学希望者の学習の状況を把握し、個々に応じた入学後のカリキュラム編成等について検討すること。

## 実践事例

### 【実施に向けて検討した方策】

入学前見学や体験入学における聞き取り調査を行い、一人一人の学習ニーズを適切に把握し、学習指導の充実につなげる。

### 【検討した方策の分析】

入学前に聞き取りをきめ細かに行うことで、学習の段階を把握することができる。特に既卒者であっても、中学卒業の日本人や外国籍の高校・大学卒業者とでは学習の段階が違うこともある。特に外国籍の入学希望者については、日本語を学びたいと考えている希望者も多いため、日本語の取得状況によっては学習段階の調整が必要となる。そのことから、入学希望者とは体験入学や面談を実施することで、日本語の取得状況を把握することができ、入学後に「何を」「どこから」学習することが必要なのかを適切に把握することができる。そのようにすることで、国語以外の学習についてもどのように学習を進めれば良いかや教材の研究や工夫にもつながる。

### 【実際に行った方策】

入学前の面談を実施する際、「話す」ことと「書く」こと、また、「聞くこと（聞き取り）」の確認を行った。

日本語の習得状況が十分でない生徒に対して、日本語能力の向上を図るために、どのような指導が適切であるかについて夜間学級と教育委員会が連携し、夜間学級の教職員を対象に教育委員会教育政策室の人権・多文化共生教育担当指導主事などが講師として、日本語指導研修を定期的実施し、日本語教育への理解を深め指導の向上を図った。

生徒の教材については、日本語指導研修講師や指導主事等が授業参観に参加したり、指導事例検討会を実施したりしながら個々の学習に応じた教材の検討・協議を行った。生徒の資質・能力の育成や学習の定着を目指し、教材(購入教材)を使用し、またそれを基に自主教材を作成した。

### 【生じた成果・効果】

成果・効果としては、入学前に生徒の状況を的確に把握することで、学習段階に応じてグループ別で学習を展開することができ、学習効率に大きく役立った。特に、外国籍であっても日本語の理解が進んでいる場合は、1年生からではなく、2年生や3年生からの入学を検討することができる。学習状況に合わせた授業を展開することで、学習効果を上げることができた。

さまざまな国につながるのがある生徒が、現在生活している日本の文化を理解するために、講師を招聘しての書道教室、陶芸教室、教科と関連させてもちつき大会等を行い、伝統文化や日本の年中行事に触れる機会を設けた。また、文化祭等で自分の国を紹介する場面を設け、様々な国の文化を知り理解をすることで、多文化共生への理解を深めることができた。

**【課題】**

課題としては、学習状況に合わせてグループ別で学習を進めることで初めは学習の理解が同じでも、学習を進めることで徐々に学習への理解に差が生まれることである。

**調査研究を踏まえた今後の取組方針**

**入学希望者への支援／効果的な面談の活用**

入学を希望する者について、今後も生徒一人一人の状況を的確に把握することやきめ細かな面談を実施し、入学者のニーズに沿った学習支援ができるように努めていき、多様な生徒の状況に応じた学習内容や学習形態についての学習指導が充実するよう検討していきたい。また教職員の研修の機会を増やし、外国につながる生徒支援についての理解を深めていきたい。

# 委託事業成果報告書

京都市立洛友中学校

【調査研究事項番号 IV】 京都市立洛友中学校

研究テーマ

「学びの多様化学校を併設する夜間中学校としての効果的な取組について」

## 【調査の目的・問題意識】

### (1) 目的

本調査は、学びの多様化学校を併設する夜間中学校として、昼間部・夜間部（以下、昼夜間部とする）が共に学ぶ教育活動の質を高め、多様な学習ニーズに応じた効果的な教育の在り方を探ることを目的とする。特に、昼夜間部が合同で行う「交流の時間」や実技教科の学習を行う合同授業において、相互作用を最大限に生かしながら学習効果を向上させる方法を探る。

また、全国的に夜間中学校の開校や不登校支援のモデルを求める自治体が増加している状況を踏まえ、洛友中学校の今後の教育の在り方を整理・検証し、全国の教育現場に示唆を与える実践モデルとして提示することを目的とする。

### (2) 問題意識

近年は、かつて夜間部において多くを占めていた、戦中・戦後の混乱期の未就学者が高齢のため入学希望が少なくなる一方で、新渡日生徒や不登校等を理由に実質的に義務教育を十分受けることができなかつた形式卒業者の入学希望が増えてきたことにより、生徒層の変化が生じている。この変化により、夜間部生徒の中には日本語能力が未熟であったり、日本文化や社会に不慣れであったりする者もおり、従来と同様の方法で昼夜間部の合同学習を設定した場合に、以前のような相乗効果が得られるのか懸念があった。

夜間部生徒が学ぶことへの強い意欲を示し、学び直す喜びを体現する姿が昼間部生徒の励ましとなり、相互に良い影響を与えているという成果は、これまでと変わらず確認できているが、こうした好循環は自然に生まれるものではなく、生徒層の変化に対応するためにも、「交流の時間」や合同授業の在り方を再度見直し、合同学習の設計と運営を改善していくことが不可欠となっている。

また、昼夜間部が共に学ぶ全国唯一の学校として、教育活動の効果と課題を整理し、多様な学習ニーズに対応した教育の在り方を再検討する必要がある。

### 【創出した先進事例】

#### 1. 実施に向けて検討した方策

##### ○「交流の時間」

1. 絵本づくり
2. 美文字
3. 暖簾づくり
4. 合同球技大会
5. 洛友中学校文化祭
6. 宿泊校外学習（修学旅行）
7. 陶芸教室
8. 華道体験
9. 書道体験
10. 多文化共生学習
11. 京友禅
12. 夜空

##### ○合同授業

音楽：「チャイムトーン」演奏

美術：「夜の学校をあかりで灯そう」

「ニセモノづくり」

「オトノトマトペ」

「絵本づくり」

保体：「球技大会種目練習」

技家：「伝統の味を知る（味噌づくり）」

○全国夜間中学校理事会への参加、夜間中学校視察

○全国夜間中学校研究大会への参加、夜間中学校視察

## 2. 検討した方策の分析

上記の各方策を実施するにあたり、特にその効果を重視し、「交流の時間」および実技教科における合同授業の在り方について内容の整理と分析を行った。

本校には「昼夜間部を併設する洛友中学校として、共通の学びを通じて多様な生徒がともに成長する場を創造する」というねらいがあり、今回検討した諸方策は、このねらいの具現化をめざすものとして位置付けた。「交流の時間」の各活動については、年齢・国籍・学習歴の異なる生徒同士が体験を共有し、互いの良さを認め合う機会となる点で、本校の学校を運営する上でのコンセプトである「世代や国籍を超えてふれあい学び合う学校」を具体化する取組であると考えた。また、合同行事や合同授業については、学習内容の保障とコミュニケーション面での課題の双方に対応しつつ、生徒の主体的な学びを促進する仕組みとして妥当であると考えられる。

さらに、生徒の学びを支える体制面の工夫や教職員配置の見直しは、多様化した生徒集団に対して継続的で安定した支援を行うための基盤づくりとして重要であり、これらの方策を関連付けて整理することで、学校が掲げる教育的効果の向上に寄与する取組が体系的に構想されているのではないかと考えた。

以上のことから、今回検討した方策は、単なる活動の羅列にとどまらず、本校の理念である「世代や国籍を超えてふれあい学び合う学校」の実践を構造的に支える枠組みとして、今後さらに発展させることで、その働きを一層強くする可能性があると予想した。

## 3. 実際に行った方策

実際の取組においても、検討段階で想定した方策を中心に、昼夜間部が協働する様々な活動を展開した。「交流の時間」に関しては、「絵本づくり」「合同球技大会」「書道体験」「多文化共生学習」等の多様なプログラムを設定し、生徒が互いの文化や経験を共有する機会となるよう努めた。また、音楽科・美術科・家庭科・保健体育科での合同授業については、それぞれの教科特性を生かしながら、互いの学び方の違いを受容し合う環境をつくることをねらいとして実施した。さらに、宿泊行事、文化祭、文集「夜空」の制作等についても、学校行事全体の中に昼夜間部が共同で取り組む機会を設定した。これらの取組を通じて、生徒同士の関係性の深化や学習意欲の向上に寄与する学びの場の形成につながった。

#### 4. 生じた成果・効果

##### (1) 教育活動（「交流の時間」・合同授業等）における教育的効果

###### ① 生徒の体験的な学びを通じた自己効力感の向上

活動の様子や普段の感想などから陶芸、手作り絵本、クリスマスリースづくり、ガーデニング等の体験的な活動が生徒の達成感を高め、様々な活動への主体的な参加や学びへ向かう意欲の向上につながったと考えられる。

###### ② 昼夜間部の相互理解の促進による視野の広がり

生徒からは、「他の人の意見を聞く大切さが分かった」「多様な価値観や背景への気づきを得た」等、相互理解の深まりを示す感想が多く見られた。共通の活動に取り組む経験が、年齢・国籍・学習歴等の違いを前提に関わる学びを促進したといえる。

###### ③ 関係性の構築とコミュニケーション力の向上

協働的な活動を通して、「人と話せるようになった」「チームワークの大切さを知った」等の感想が多く見られ、目標やプロセスを共有することによって相手の立場に立つことができ、信頼関係の構築につながった。活動の中で役割を担いながら他者に関わる経験が、対人面での自信形成に寄与したと考えられる。

##### (2) 教育活動を支える構造的な成果

###### ① 個性に応じて協働できる環境づくりの有効性

生徒は年齢や国籍等、自分とは異なる背景を持つ方との交流の中で自分の役割を担い、「得意を發揮できた」「自分の役目があった」と感じており、各自の個性に応じた環境設定の効果が確認できた。個に応じた役割の設定や活動設計の工夫が、参加のしやすさや所属感の向上につながったと考えられる。

###### ② 継続的な取組による長期的成長

一年に渡る活動を終えて、「去年と比べて大きく成長した」「人生が変わったように感じる」等の感想が見られ、継続的活動が自己理解や所属感の向上に寄与したことが見られた。

#### 5. 課題

本校は、外国籍生徒や新渡日生徒の増加、日本語指導を必要とする生徒が増えており、日本語でのコミュニケーションが十分に成立しない場面が増えている。これにより、昼夜間部生徒が自然に関わり合うこれまでの交流の形が保ちにくくなり、活動の設計そのものを見直す必要が生じている。また、夜間部においても不登校経験者が増えており、対人関係への不安やコミュニケーションの困難さを抱える生徒がいる。昼間部にも同様の背景を持つ生

徒がいることから、双方にとって交流活動が負担となる可能性があり、従来の取組をそのまま実施することが難しくなっている。

#### 【調査研究を踏まえた今後の取組方針】

ここ数年、生徒の多様化が進む現状を踏まえ、教育活動全体を継続的に見直しながら、昼夜間部がともに安心して学び合える体制づくりをさらに検討していく必要がある。特に、日本語指導が必要な生徒や不登校経験者の増加といった本校の課題に応じて、支援体制の強化と活動内容の工夫が重要となると考える。日本語が十分に通じない生徒への支援として、日本語指導・多言語支援の充実や ICT を活用した理解補助など、コミュニケーションの基盤を整える取組を進めたい。また、昼夜間部双方に不安を抱える生徒が増えていることを踏まえ、「交流の時間」や合同授業においては、負担の少ない活動や小集団での協働など、安心して参加できる環境を構築する必要があると感じる。さらに、交流活動で確認された協働的・体験的な学びが生徒の自己効力感を向上させたり相互理解を深めたりする効果を今後も継続して高められるよう年間計画の中に位置付けながら改善を重ねていく。加えて、夜間中学校全体で生徒の多様化が進む中、本校の実践を整理・検証し、全国の夜間中学校や多様な学びを行っている教育現場に向けた発信も継続したい。本校が全国に先駆けて昼夜間部併設の教育モデルを提示する学校として、その役割を果たしていくことを目指す。

## よりよい学校生活を送るための効果的な学校行事や校外学習等の在り方について

### 調査の目的・問題意識

#### 1. 目的

- ・学校行事や校外学習に参加することによって、相互理解を深め、公衆道徳を得る。

#### 2. 問題認識

- ・言語や文化の違いなどで、日本語によるコミュニケーション不足に陥り、学校生活に馴染むことができない生徒がいる。
- ・日本語の読み書きができず社会生活において困難が生じる生徒や、人間関係において馴染めず、自己表現が苦手な生徒がいる。

### 創出した先進事例

#### 1. 実施に向けて検討した方策

- ・生徒が発表する場及び自校および他校の生徒と交流する場を設ける。
- ・日々の学習を深めたり日本の文化に慣れ親しんだりできる場を設ける。
- ・各行事への参加率を向上させるために周知方法を検討する。

#### 2. 検討した方策の分析

- ・各行事後に実施したアンケート及び感想、話し合い活動の内容。
- ・各行事の参加率。

#### 3. 実際に行った方策

- ・学校行事等で生徒が発表する場及び自校および他校の多くの生徒の交流する場を設ける。
- ・校外学習で日ごろの学習を深めたり日本の文化に慣れ親しんだりできる体験学習を取り入れる。
- ・各行事への参加率を向上させるため、事前授業及び行事案内掲示、行事の説明、予行練習等の周知方法を用いた。
- ・生徒が校外行事等の学校行事で安心して参加できる環境づくりのため、生徒の参加費用の軽減及び体力的な負担軽減等の支援を行った。

#### 4. 生じた成果・効果

- ・学校行事等で生徒が発表する場を設け、自分自身の言葉で表現することで振り返ることができ、近畿夜間中学校協議会の三大大行事では、自校および他校の多くの生徒と交流を行い、他者と共通する部分や異なった部分を知り、「多文化共生」、「相互理解」を学んだことを振り返ることによって、過去の自分と比べてどれだけ成長したか、気持ちの変化はあったのかを気づくことができた。

## よりよい学校生活を送るための効果的な学校行事や校外学習等の在り方について

- ・校外学習では体験活動に取り組むことで、日々の学習を深め、日本の文化に慣れ親しむことや、学齢期に十分学べなかった生徒や外国籍の生徒たちの学習意欲向上につながったと考える。

### 5. 課題

- 各行事に参加していない生徒に対して、
- ・振り返る等をして、自分自身を成長させる場及び「多文化共生」、「相互理解」できる場を作り出すこと。
- ・生徒に参加を促す周知方法。

※生徒が行事に参加していない理由

- ・「仕事」や「子育て」、「費用」、「年齢」、「持病」など。
- ・学校を欠席しており、行事自体を知らない。
- ・学校行事に対しての認識がない。

## 調査研究を踏まえた今後の取組方針

### 1. 「各行事に参加していない生徒に対して」の支援

- ・参加を促す周知方法として、入学時に学校行事の紹介を行う。また、説明会に参加していない生徒に対して、後日案内の説明や電話連絡をする。
- ・学級活動の時間を活用して、他者の前で自分自身のことを発表する活動や他者の発表を聞く活動を設定。

### 2. 「各行事への費用に関して」の支援

- ・活動内容については、費用のかからないものを検討する。
- ・移動手段について、貸切バスを使用する行事を厳選する。

## 【 IV. その他夜間中学における教育活動充実に関すること 】

天理市立北中学校夜間学級

# 「夜間中学の教育活動への展開を目指した、 大人の生徒にとっての効果的な校外学習の在り方」

## 成果報告書

### 調査の目的・問題意識

◆**目的** 本校には多様な背景を持つ生徒が集まっていることから、生徒の多様性に配慮した上で、大人の生徒が持つ生活経験を掘り起こす社会見学や体験学習を校外学習として実施し、生徒の日本事情の理解と相互理解をすすめる、夜間中学の教育活動へ展開することを目指す。

◆**問題意識** 本校では、年齢、生活歴や文化や価値観、学習歴、母語の違いや日本語指導の必要性等、多様な背景をもつ生徒がともに学んでおり、このことは、多様な意見や文化に触れて多様性を実感し学習意欲が向上する等のいい面がある一方で、学校生活における生徒の意思疎通や共感・相互理解、学習の進め方等に課題もある。この解決のためには、生徒どうしが積極的に関わりを持ち、互いの違いとその背景を十分に認識しつつ、ともに学ぶ仲間として結びついていけるような仕組みを教育課程の中で工夫することが必要である。また、夜間中学の生徒は大人であるため、それぞれの生徒が持つ生活経験を掘り起こし、相互理解や学習につなげることが可能である。

### 創出した先進事例

◆**実施に向けて検討した方策** ①生徒の経済的負担の軽減 ②生徒相互の理解と交流の促進 ③識字・日本語学習をしている生徒の言語習得状況へ配慮 ④大人の生徒が持つ生活経験を掘り起こす ⑤学習と生活をつないだ発信 ⑥観察と評価

◆**検討した方策の分析** ①今事業の活用で生徒個々の費用が抑制される ②クラスをこえてともに行動したり、同じテーマで生活経験を出し合うことで一体感を持ちながら理解と交流が促進される ③事前の説明や学習、母語サポート等で理解を促せる ④生徒の背景理解を進めることで共通するテーマを見いだせる ⑤作文制作や、文化祭や市民向け広報・啓発活動等での展示発表が考えられる ⑥感想集約や生徒観察が評価に活かせる

◆**実際に行った方策** ①今事業への応募し計画・執行・報告した。市教委の補助金を活用した。②京都伏見の日本酒造りを通じて発酵について学び、日本酒造りと日本の歴史・文化が深く結びついていることを学んだ。生徒のふるさとのお酒の文化について生活経験を出し合った。京都伏見の黄桜伏見蔵・月の蔵人・伏見の街並み・伏見稲荷大社を訪れ、クラスをこえてともに行動した。非常勤教員による母語サポートを行った ③事前の説明や2回の合同授業(「社会・京都の日本酒造り」「生活文化・みんなの酒文化」)を行った。非常勤教員による母語サポートを行った。移動車中でワークシートを用いて学習した ④校外学習での日本酒造りの学習を起点として、生徒が持つお酒にまつわる生活経験を聞き取った ⑤校外学習やお酒にまつわる生活経験について、作文制作や、文化祭や市民向け広報・啓発活動等での展示発表を行った ⑥観察結果を共有し評価した

◆**生じた成果・効果** 校外学習に参加した生徒の満足度は非常に高く、消極的行動姿勢が変容した生徒のようすも共有できた。生徒個々のアイデンティティやセルフエスティームに良い影響を与え、学習意欲の向上にもつながっており、効果的な校外学習であった。大人の生活経験とつながる校外学習を起点とした教育活動への展開は、生徒どうしの理解や連帯感を醸成し、インプットだけでなくアウトプットにつながり、すべての生徒層に効果的だった。

◆**課題** 識字・日本語学習者への支援や、効果の測定方法や観点別評価の明確化は、改善の余地がある。

### 調査研究を踏まえた今後の取組方針

今後も、大人の生活経験とつながる校外学習を継続して実施し、その学習から作文はじめ文化祭等での発信・発表につなげ、夜間中学・生徒の教育活動全般を活性化させていく。

## 「夜間中学における教育活動の充実」

### 調査の目的・問題意識

#### 1. 目的

夜間中学生の自立（自己解放と自己受容）

#### 2. 問題認識

苦悩と自己否定

- ・夜間中学生の多くは、自信が持てず引け目を感じやすく孤立しがちである。
- ・悩みや不安の内容が多岐にわたる上に、非常に重く複雑化しているため、大きなストレスを抱えている。
- ・生徒が、自身の子どもの教育や学校生活に関して、状況を把握することが非常に難しい。
- ・生活が困窮したり、精神的な課題を抱えたりしているため、夜間中学に通うことができない生徒もいる。
- ・少ない教員集団で構成される夜間中学では、夜間中学の意義等を継承することが困難である。

### 創出した事例 ①

#### 1. 実際に行った方策

- ・SCの回数増加による継続的カウンセリングの実施。
- ・校内研修・教員へのフィードバック共有による支援力の向上。
- ・SSW機能を活用した関係機関との連携・同伴支援。
- ・子育て支援（保護者相談、子どもの学習支援、在籍校との連携）。

#### 2. 生じた成果・効果

- ・生徒の主体性が向上し、支援の方向性が明確化。
- ・相談件数増加と安心感の醸成。
- ・子どもの学習・生活面の改善が保護者の安心感の向上に。

#### 3. 課題

- ・取組の全体化・体系化が不十分。
- ・多様・複雑な課題に対応する継続的体制強化が必要。

## 創出した事例 ②

### 1. 実際に行った方策

- 野外活動に火おこし体験を取り入れた。

### 2. 生じた成果・効果

- 生徒さん同士の自然な会話が生まれただけでなく、育てる会の方々や職員との交流も活発化。
  - 言葉や身振り手振りを交えながら、国境を越えたコミュニケーションを行う場面が多く見受けられた。
  - 生徒さん同士のコミュニケーションが自然に促進され、火おこし体験中は終始、笑顔や笑い声、成功時の歓声が絶えない、非常に活気のある雰囲気が形成された。
  - 和やかで一体感のある雰囲気が生まれ、普段は会話の機会が少ない生徒さん同士や、育てる会の方々との間でも自然に会話が広がった。
- 生徒さんの人間関係力の向上に寄与するとともに、日常的に抱えがちな心理的負担やストレスの軽減にも一定の効果をもたらした。
- 事業終了後においても、生徒さん同士が自発的に会話を交わす場面が増加していることが確認された。

### 3. 課題

- 本事業に参加できなかった生徒がいる。

## 調査研究を踏まえた今後の取組方針

### 「解放（克服）と自己受容の取組継続」

- SCや関係機関との連携を一層強化し、支援体制の充実を図る。また、生徒の子育て支援を継続的な仕組みとして整備するとともに、教員の支援力向上に努める。これらを通して、生徒が安心して学べる学校づくりを推進していく。
- 安心と成長につながる交流を深めるにあたり、火おこし体験は非常に有効であることが判明したので、今後も続けていく。また、火おこしに代わる取組を模索していく。